

平成 22 年 1 月 13 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006 -2008
 課題番号：18720061
 研究課題名（和文） 越境の詩学 亡命ロシア文化における映像文化と文学の接点としてのナボコフ研究
 研究課題名（英文） Poetics of Transborder Culture: Studies of a Russian Émigré Writer V. Nabokov 's Works as an Interface of Visual Culture and Literature

研究代表者

毛利 公美（MOURI KUMI）
 東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
 研究者番号：30419212

研究成果の概要：

亡命ロシア作家ナボコフの作品に写真・映画などの映像文化が与えた影響について、作家が生きた時代（1899-1977）背景や他の作家の例なども念頭に置きつつ、広く研究した。また、数多いナボコフ研究の中でも従来ほとんど扱われてこなかった映画「ロリータ」のシナリオを分析し、作家にとって「映画的なもの」とは何かを考察した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	900,000	0	900,000
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2100,000	150,000	2,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：ロシア文学・亡命文学・ナボコフ

1. 研究開始当初の背景

（1）ソ連崩壊後、それまで黙殺されてきた亡命文化への関心が高まり、さまざまな資料が公開されるとともに、ロシア本国でも亡命文学についての研究が盛んになった。それらの新しい資料によって、亡命社会・亡命文化の全体像に近づくことが可能になった。第一次亡命ロシア文学を代表する作家であるナボコフの作品についても、そうした新しい資料や研究成果によって得られた知見を踏まえて読み直すことで、より深い理解が得られることが期待された。

（2）ナボコフはしばしば漠然と「映像的」作家と言われることが多く、映画とのかかわりについては、これまでも多くの指摘がなされてきた。とはいえ、従来のナボコフ研究においては、作品中にみられる映画のアリュージョンの断片的な指摘や、「作家の映画的文体」というような印象論のレベルにとどまっておき、ナボコフの作品のどこが「映像的」と言えるのか、また、ナボコフがどの程度まで映画を意識して作品を書いていたのかを、実証的に示した研究はこれまで行われていなかった。

(3) ナボコフの代表作のひとつである長編『ロリータ』については、すでに多くの研究がなされているが、作者が自らの散文作品をどのように映像化するべきかを考慮して自ら手掛けたシナリオ版『ロリータ』は、まったく未開発の研究分野であった。しかし、「ナボコフと映画」という問題を考慮するとき、この作品は非常に重要である。

(4) 本格的な昨今の領域横断的な文化研究の成果を取り入れ、映像論・視覚論と文学研究の接点として、ナボコフの作品を分析することで、20世紀における映像文化のインパクトが文学にどのような影響を与えたかを考察する。それを他の時代・他の作家との引かいう研究に応用することによって、学際的な広い視野に立った、これまでにない新しい研究の可能性が開けると考えられた。

2. 研究の目的

(1) ナボコフの作品の具体的な分析と並行して、ロシアやアメリカの亡命関係のアーカイブ史料を用いて背景の事実の整理を行い、亡命文化全般についての理解を深め、マクロレベルの亡命文化・社会史の研究と個々の作品のミクロレベルでの分析の融合をはかる。それによって、ナボコフ作品のより深い理解を得る。

(2) 文学作品研究の枠を越えて、歴史・社会・文学・映像論といった複数の分野にまたがった関心に根ざした「亡命ロシア文化に関する総合的な理解」につながる研究を目指す。

(3) 上記の成果を踏まえ、20世紀の他の作家についても同様に分析し、映画が与えた影響や映像文化と文学の接点、相違点等についてさらに研究を進めるための手がかりとする。

3. 研究の方法

(1) 亡命系新聞・雑誌などの定期刊行物や亡命作家の作品等にみられる映像に関する言説を通じて、亡命社会と映像文化のかかわりを整理し、当時の同時代人の映像文化に対する理解がどのようなものだったのか、他の作家において映像文化との接触がどのような形で作品に現れたのかを明らかにする。

(2) 実際の映像（映画や出版物に用いられた写真など）を見ることによって当時の映像文化についての的確な認識を得る。

(3) ナボコフ自身の作品の分析および作品ノートや書簡などのアーカイブ資料調査を通し、ナボコフの文学にとって映像文化が占める位置（「ナボコフにとっての映画」「映画的なもの」「映画的文体」とは何を意味するのか等）を明らかにする。とりわけ、ナボコフの代表作のひとつである長編小説『ロリータ』とその作者自身によるシナリオ版、そして『ロリータ』を基にして作られた二本の映画（1962年のキューブリック版および1997年のライン版）を比較、分析することで、「映像と文学の関係」を問い直す。

(4) (1)から(3)の研究成果を総合して、ナボコフの作品世界と「映像文化」「亡命文化」の関係を明らかにし、他の作家についても可能な限り比較検討を試みる。

4. 研究成果

最初に断っておかなければならないのは、研究計画当初と所属機関を移籍したことや、家族の介護問題、自身の健康上の理由など、諸般の事情により、海外（ロシアおよびアメリカ）での資料収集、国際学会での報告をはじめ、多くの計画を断念せざるを得なかったことである。そのため、予定していたニューヨーク公立図書館バーク・コレクションやアメリカ国会図書館のナボコフ・アーカイブにおいて資料を参照し、その検討に基づいた新しい研究をするという目的を叶えることができなかった。よって、当初の計画に比べ、課題研究の期間が終了した時点でまとめることができた成果は、極めて限定されたものにとどまっている。

とはいえ、限られた資料と時間のなかで、与えられた可能性を生かし、以下のような成果をあげることができた。

(1) 資料収集、情報収集の側面における成果と課題

亡命ロシア社会についての背景知識を深めるという目標に従い、近年ロシアで出版された亡命ロシア関係の資料を中心に研究を進め、本研究課題で扱おうとしているさまざまな問題について、一定の知見を得ることができた。

映像文化と言語文化それぞれがもつ特徴について、具体的に論じるため、映像資料や映像論に関する収集を行った。

上記いずれについても、まだ充分とはいえないし、何より、肝心のナボコフ・アーカイブに接する機会がなかったことは非常に残念である。今後、チャンスがあれば、ぜひそれを叶えるとともに、すでに収集した資料をより深く読み込む努力をつづけたい。

(2) 人的交流、人脈の広がりによる将来の研究協力への展望

2006年12月、当時所属していた北海道大学スラブ研究センターで行われた国際シンポジウムにおいて、ドイツにおけるロシア系移民の問題を研究しているフンボルト大学のツイビルマ・ダリエヴァ氏、ジェンダーの視点を取り入れながらロシアおよびバルト地域の映像・文化を研究しているラトビア大のイリーナ・ノヴィコヴァ氏などと意見交換を行った。

2007年10月には、日本学術振興会「人文・社会科学振興のためのプロジェクト」(研究領域 V-1 「伝統と越境—とどまる力と越え行く流れのインタラクション」第2グループ「越境と多文化」)との協力により、ウラジーミル・アレクサンドロフ氏の来日を実現させた。アレクサンドロフ氏は、その画期的な著書 *Nabokov's Otherworld* によりナボコフ研究の流れを大きく変えた人物であり、自身も亡命系ロシア人の第二世代である。今回の来日に際して行われた複数の講演やディスカッション、個人的な意見交換を通じて、ナボコフ研究にかかわる情報や知見に限らず、亡命ロシア社会の自己意識の問題などについても、興味深い意見をうかがうことができた。とくに、10月25日に東京大学で行われた講演“Jules Verne's Michel Strogoff and Russian Émigré Cinematic Mythology”は、ロシア人亡命社会と映画の関係という本課題の関心に非常に近いテーマを扱ったものであり、大きな刺激を受けた。

その他にも、所属機関(平成16年度:北海道大学スラブ研究センター、平成17-18年度:東京大学大学院人文社会系研究科現代文芸論研究室)および、自ら構成の一員であるその他の科研プログラム(日本学術振興会による人文・社会科学振興プロジェクト研究領域 V-1 「伝統と越境—とどまる力と越え行く流れのインタラクション」第2グループ「越境と多文化」、ならびに、科研費研究グループ「グローバル化時代における文化的アイデンティティと新たな世界文学カノンの形成」)と協力し、本研究課題にも関連が深いシンポジウムや特別講演などの企画を積極的に推進した。以下にその一部を挙げる。

- ・ 「規範と境界を超える文学—ダニール・ハルムスをめぐって—」, 2009年3月30日, 東京大学
- ・ 演出家・ロシア功労芸術家レオニード・アシモフ氏特別講義「チェーホフ劇の現代性」, 2008年12月12日, 東京大学
- ・ “Translation and World Literature” (International Workshop), 2008年7

月11日, 東京大学

- ・ アレクサンドル・ヴァイツェホフスキー氏特別講演「原画を通じて作品の魅力語る」, 2007年10月19日, 東京大学
- ・ 2007年度日本ナボコフ協会大会(Zoran Kuzmanovich 特別講演「アメリカにおけるナボコフ受容」およびシンポジウム「ナボコフと世界文学」), 2007年6月9日, 東京大学
- ・ “Constructing Nation and Region: Russia, USSR and European Identity”, 2006年12月17日, 京都大学
- ・ 国際研究集会「伝承のマニエール—マイノリティの言語継承と記憶」, 2006年7月1日, 神戸大学

上に挙げたもの以外にも、数多くのシンポジウムや研究集会、特別講演などの企画に、会場からの参加者として関わることができた。そうしたなかで、国内外のさまざまな研究者たちと意見交換をすることによって得られた新しい知見や広い視野、人脈は、今後の研究において、大きな財産となるものと確信する。

(3) 期間中にまとめることができた具体的な成果について

ソ連の文芸誌や新聞に掲載された記事においてナボコフをはじめとする亡命文学がどのように扱われていたかを分析することによって、ソ連時代の文芸批評のありかたを浮かび上がらせるとともに、19世紀から現代ロシアのポストモダニズムまでのロシア文学とナボコフの作品との関連性を明らかにした。その成果の一部は、論考「里帰りしたロリータと子供たち—ソ連、ロシアにおける『ロリータ』の受容と変容」にまとめられている。扱っている二つのテーマはどちらも大きなものであり、誌面の制約上、十分に論じきれなかった部分については、今後また別の形で改めて論じたい。

日本ナボコフ協会が主催する研究発表会において行った報告「ナボコフの映画的手法—言葉から映像へ: *Lolita*と*Lolita: A Screenplay*」は、ナボコフの映画シナリオ版『ロリータ』を、小説版の原作および二度にわたる映画化作品(1962年のキューブリック版と1997年のライン版)を詳細に比較・分析することを通して、ナボコフにとって「映画的なもの」「映画的文体」とは何を意味するのかを明らかにし、「映像と文学の関係」を問い直すためのケーススタディのひとつの成果である。研究の結果、()ナボコフの散文が極めて映画を意識して書かれたも

のであること()逆説的に、作家が「映画
的」と考えたシーンがじつは文学にしか表象
しえないものであり、ナボコフがすぐれた散
文作家であるゆえにこそ、映像作家としては
限界があったこと()言語による表象と言
語による表象それぞれについての、いくつか
の特徴が明らかにされた。

(4) 今後の課題と具体的な目標

亡命やディアスポラ・越境をめぐる問題は、
グローバル化がすすむ現代においてますます
鋭化している。近年、「越境」というキー
ワードをタイトルに掲げた研究も数多く
あるなかで、本研究課題が扱おうとしている
時代や対象をどのように位置づけるべきか、
明確な問題意識と周到な計画をもって課題
に当たる必要があることを痛感した。

多数みられる「越境」研究の多くは、現代
の多文化的状況を扱うアクチュアルな文化
研究・社会分析といった側面が強い。前世紀
の亡命ロシアの歴史的遺産を見直すことによ
って得られる教訓を現代にどうフィード
バックしていけるかを考慮しながら、本研究
の成果と反省を今後の研究につなげていき
たい。

また、期間中に発表できなかった成果につ
いては、蓄積されたそれ以前の研究成果とあ
わせた単著の出版にむけて、執筆、編集作業
を進めたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計2件)

1. 毛利公美, 「光学機器としての語り手 ナ
ボコフ『賜物』における映像と語り」(『ロ
シア語ロシア文学研究』38号, 2006年9
月28日, 42-48頁)
2. 毛利公美, 「里帰りしたロリータと子供た
ち - ソ連、ロシアにおける『ロリータ』
の受容と変容」(『英語青年』2008年4月
号, 19-22頁)

[学会発表](計1件)

1. 毛利公美, 「ナボコフの映画的手法 - 言
葉から映像へ: *Lolita* と *Lolita: A
Screenplay*」(2008年5月31日、日
本ナボコフ協会研究発表会、東京海洋
大学)

[その他]

関連 HP

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/genbun/index.html>

<http://www2.kobe-u.ac.jp/~kumi3/>

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>

<http://vnjapan.org/main/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

毛利 公美 (MOURI KUMI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教

研究者番号: 30419212

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし